

短編映画 (しみじみした男の友情もの、フ
アンタジー風味)

池やんとオレ (初稿)

脚本 大岡俊彦

映画「いけちゃんどぼく」キャンペーン映画

登場人物表

ヨシオ (35)

調子のいい、お人よしのサ
ラリーマン。

池やん (35)

ヨシオの親友。落ち着いた
深い思考の人。

池やんの妻 (29)

○居酒屋、内、夜

サラリーマンの集う賑やかな居酒屋。
乾杯されるビールジョッキ。

ヨシオ「カンツツパイイ！！」

ヨシオ（35）と池やん（35）がカ
ウンターで飲んでいる。テンションの
高いヨシオ。

ヨシオ「いやー今日は池やんのおかげでホン
ット助かったわ。部長に大目玉くらって契
約全部吹っ飛ばすだよ。いやヤバかった」
池やん「オマエはいつも心配させるよ。一
人で大丈夫かってね」

ヨシオ「（既にほろ酔い）大ー丈ー夫ーだよー
ー。って言ったら、あのミスは痛かつ
たわ。池やんはいつもいつもオレのフオロ
ーしてくれるよな。ありがとな」

池やん「もう口ぐせみたいなものだよ。一人
で大丈夫かってよ」

ヨシオ「大ー丈ー夫ーだよー」

池やん「今日はオゴリな」

ヨシオ「ワハハハハハ」

飲む二人。笑うヨシオ、微笑む池やん。
ヨシオNA『池やんはずっと前からそばにい
る。池やんはなんとなくそばにいる。それ
で、オレと池やんは、親友だ。たぶんずつ
と』

○タイトル 「池やんとオレ」

○同、居酒屋の席

ヨシオ「…でも池やんは子供の時でも中学で
も高校でも、会社入ってからもうまくフオ
ローしてくれるよな。池やんが『一人で大
丈夫か？』っていうときは、あ、やべっ！
って時なんだよ」

池やん「ホント不安なんだよ。あぶなかしく
ってしょうがねえ。そもそも野球部でコン
ビなんか組むんじゃないよ」

ヨシオ「そうそれ！ オマエが後ろで構えて
たから、オレどんな球投げても打たれたら
捕ってくれる、って思ってたわ」

池やん「打たせて捕る、だろ」

ヨシオ「打たれても捕ってくれる、だよ。ワ

ハハハハ」

池やん「そういえばさ」

ヨシオ「何？」

池やん「あのボール、返してよ」

ヨシオ「何？」

池やん「準決勝のさ、ウイニングボール」

× ×

回想。地面にグラブ。ぎりぎりで捕つ
たボール。

× ×

池やん「アレずつと気になってたんだよ。オ
マエが持つてるの、やっぱヘンだよ。オレ
が捕って勝ったんだ。そろそろ返してくれ
よ」

ヨシオ「やだよ」

池やん「なんでだよ」

ヨシオ「ウソだよ。オレが欲しいーっつ
つたらオマエ素直にくれたもんな。返すよ

(と立つ)

池やん「え」

ヨシオ「しよんべん」

ヨシオは既にフラフラである。壁にぶ
つかったり。

池やん「オイ一人で大丈夫かよ」

ヨシオ「大ー丈ー夫ーだよー。あ、コレ
言うとダメだったんだ。ワハハ」

トイレへ。

池やん「…(ひとり飲む)」

帰ってきたヨシオに、

池やん「オレさ、オマエに言っていない秘密が、」
ヨシオ「(聞かずに) そういえばさ、あの女か
ら電話かかってきたんだけど、覚えてる？」

池やん「女？」

ヨシオ「二人で大学ん時テレクラいったじゃ
ん。んで待ち合わせたブス」

池やん「おおあのブス。やべーブスだー
ーって石投げて猛ダッシュしたな」
ヨシオ「あのあとヤツたんだよ」
池やん「マジで！？ ブスだろ！？ この世
の果てかと思っただぞ！？」
ヨシオ「どうしても童貞捨てたかったんだよ
なー。若かったんだよオレも。ずっと秘密
にしていたんだけどさ。でもホンットひど
いブスだよ」
池やん「で電話かかってきたって？」
ヨシオ「おうオレあれから電話番号変えてね
えんだなーって思ったわ。明日からケータ
イ変えようかと思っつて」
池やん「ヒデエな」
ヨシオ「だってブスだぜ？」
池やん「ブスじゃなあ」
ヨシオ「アレでオレ大人になったんだよ。ワ
ハハハ。今日は暴露大会だな。池やんはい
つ大人になったんだよ？」
池やん「大人か。(真面目になる) ……そうだ
な。小4だな」
ヨシオ「オマエ小4でやったの！？」
池やん「ちげーよ。オレは一人なんだな、一
人で生きてかなきゃいけねえんだな、って
思った時」
ヨシオ「え、…なんでそんなこと思ったの」
池やん「いじめられてただろオレ」
ヨシオ「そうなの？ 言えよ。知らなかった
よオレ。なんで言わねえんだよ」
池やん「オマエは昔からそういうとこ鈍いよ
な」
ヨシオ「小4だろ。クラス隣になった時だな。
誰だ、たけしか」
池やん「…そんなときから、オレは大人になっ
た気がする」
ヨシオ「一人だなんてさびしい事言うなよ。
人間はみんな生きてるから面白いんじゃない
ねえかよ。チームなんだよオレらみんなさ
あ」
池やん「それを教えてくれたのもオマエだよ」

ヨシオ「なに？」

池やん「オマエが野球部にさそつたんじゃん」

ヨシオ「え？ オレだっけ？」

池やん「ホント覚えてねーな。それでいじめのスパイラルから抜けだせたんだ。：お前はオレが助けたみたいに言ってるけど、本当はお前がオレを助けてくれたんだぜ？」

ヨシオ「覚えてねーなあ」

池やん「そんなもんだよ。：それがいいんだよ」

一杯飲みほす池やん。

池やん「：今までずっと秘密にしてたんだけどさ…。言うよ」

ヨシオ「：なに？」

池やん「あの準決勝のボール、実は落としてた」

ヨシオ「マジで!？」

池やん「オレしか知らない。審判から見えにくい角度だった。オレが捕ったフリでごまかして、あの試合、勝った」

× × ×

回想。地面にグラブ。ボール捕るが、一旦地面に落ちる。右手でグラブに押し込む。

× × ×

ヨシオ「ウソ!？ 池やんスゲー捕ったよってずっと思ってたよ」

池やん「：それでオマエがすげー喜んで、このボールくれて、オレたちコンビの証だつて言うからさ。：でもあのボールはウソボールだ。あの試合、勝ってなかったんだ」

ヨシオ「(ビールを一気のみ)：関係ねえよ。関係ねえよ。ウソボールなんかじゃねえよ。あのボールはオレたちがコンビでずっとやってきた証なんだよ。打ってもらって捕ってもらおうコンビなんだよ」

池やん「：」

ヨシオ「？」

池やん「オレの方が負担でけーじゃねえか」

ヨシオ「えっ、ワハハハハハハ」

○居酒屋の外、夜

泥酔しているヨシオ。

ヨシオ「ういーろーろーろー」

池やん「飲み過ぎだろ」

ヨシオ「ラストのごはん三杯きつかった」

と、フラフラと歩き出す。

池やん「…一人で大丈夫かよ？」

ヨシオ「心配すんじゃねーよ。オレはもう立

派な大人だぜ？ 一人で、大丈夫だよ」

池やん「…そうか。大丈夫か」

闇に消えていく池やん。何か言いたそう
うな。

ヨシオ「…」

○次の朝、ヨシオの部屋

なりひびくケータイのコール。

昨日の服のまま寝ているヨシオ。

ヨシオ「(頭抱えて) んー…頭いてえ…」

頭がぼーっとしたまま、電話に出る。

ヨシオ「もしもし。…ハイ。…え？ ウソ。

…池やんが死んだ？」

慌てて起き上がるヨシオ。

ヨシオ「なんで？ いつ？ 昨日の9時って…

ちよつと待ってよ、その時オレあいつと飲
んでたんだぜ！？」

○葬儀場

喪服のヨシオ。池やんの遺影。池やん
の妻にあいさつするヨシオ。

ヨシオ「池やんが死んだなんて…まだ信じら
れないです。…オレ、酔っぱらいすぎてた
のかな。あいつが死んだその時間、オレあ
いつと飲んでたんですよ。久しぶりに昔の
話して、(ボロボロのボールを出して) あい
つにコレ返してって言われて、ホントはお
前がオレを助けてくれてたんだって、…あ
いつ、やけに冗談言わずにホントの事ばっ

か言うよなと思つてて…」

× × ×

ヨシオの想像。一人で居酒屋で笑つて
飲んでるヨシオ。

× × ×

ヨシオ「オレ、酔っぱらつてただけのかな
…」

池やんの妻「昨晚私の所へ、夢の中で会いに
来てくれた気がするんです。夢枕に立つ
てやつですか。…たぶん、あなたの所へ行
つたんだと思います」

ヨシオ、遺影の前にボールを置く。

ヨシオ「返しに来たよ」

× × ×

別れる時の回想。

池やん（回想）「一人で大丈夫かよ」

× × ×

ヨシオ「心配すんじゃないよ。オレはもう立
派な大人だぜ？ …一人で大丈夫だよ」

× × ×

池やん（回想）「…そうか。大丈夫か」

× × ×

遺影を見つめるヨシオ。せつない音楽。

ボールを取るヨシオ。

ヨシオ「…やっぱコレ、オレがもつとくわ。

一人じゃ大丈夫じゃねえ時用にな」

ヨシオNA『池やんはずっと前からそばにい
た。池やんはなんとなくそばにいた。それ
で、オレと池やんは親友だ。たぶん、ずつ
と』

ボールを握るヨシオ。